

提出日：令和 3 年 3 月 9 日

所 属：獣医学部 基礎教育系

氏 名：石井康夫 職位：准教授

役 職：基礎教育系主任 附属教育推進センター長

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
基礎科学英語	獣医学科	必	1 年次	30
基礎科学英語	動物応用科学科	必	1 年次	30
英語講読 II	動物応用科学科	必修選択	2 年次	50
英作文表現 II	動物応用科学科	必修選択	2 年次	50
英語特別演習	動物応用科学専攻	選択	MA1	10
世界文化史	動物応用科学科	選択	1 年次	30
英作文表現	獣医学科	必修選択	1 年次	50
英作文表現 I	動物応用科学科	必修選択	1 年次	30
総合英語 (*隔年担当)	獣医学科	選択	2 年次	70
卒業論文	獣医学科	必修	6 年次	3
卒業論文	動物応用科学科	必修	4 年次	5
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3 年次	2

・基礎科学英語においては、獣医学部の初年次必須科目として、主に哺乳動物の細胞から体の諸機能について、英語で考え、その基礎的な語彙を習得することにある。また動物をめぐる様々な問題や事象（病原体、福祉、環境、人間社会との歴史）などについても考察を深めることにある。

・英語講読においては、動物：産業動物 伴侶動物 野生動物に関する英語文献を読めるようにすることが主な目標となる。また動物や人間社会をめぐる諸問題：環境 衛生 食糧 気候などについても英語で読めることを主な目標とする。

・英作文表現 II は、その 1(両学科担当)においては、短文での基礎科学的表現を習得することを目標とする。英作文表現 II では、動物に関するテーマのみならず、人間社会と動物との接点（食害、食糧、環境、生態系、外来種問題など）についての Passage 作成を目標とする。あるテーマについて、「自己の見解を英語で発信する」ことをその主たる教育・学習目標とする。そのためのテーマに関連する語彙の習得、Passage 作成のための文章作成法など

を学ぶように指導している。基本的には一節の和文を英語にする作業、また内容についての自己の見解を英語で述べる、またグループによる問題の検討、それについて英語で見解を述べるなどの学習を通じて、英語による思考と意見の提示を可能とすることを目標としている。

- ・英語特別演習は、大学院博士前期課程の院生が選択で学ぶ授業である。主に英語の論説を「読む」訓練を通じて、忘れがちな基礎的英語スキルから、難易度の高い英文の読解にいたる授業を通じて総合的な英語力を涵養することを主たる目的とする。

- ・選択科目として「世界文化史」を担当している。動物応用科学科 1 年生の選択科目として、広く世界の歴史と文化を学ぶ機会を設けている。歴史と地域、人間の社会活動を文化について、その多様性、時代性、地域性など、民族や歴史を通じて多様な事象を学び、多様に変容する「文化」について、自己の見解を発信させながら学習していくことがその目標となる。

- ・英作文表現の 1 年次においては、科学的な短文作成を主たる目的としている。発信型表現 作文というレベルの前の段階において、基礎文法に基づく正確な英文作成のスキルを習得することが目的となる。オリジナルの教材資料を用いて、獣医療・医学・健康・動物飼育管理に関連する内容を盛り込み、短文のフォーム：動物の気持ちをなだめることは必要である。～を丁寧に扱う、～を測定する、～の治療・薬剤は～緩和に有効である、～は～の症状であると推測することは妥当なことである、～を～と診断することは適切である、～は緊急を要する、～は衛生的に必要不可欠である、実験により～の知見を得ることができた。

などの簡潔明瞭な表現を毎回の学習テーマに沿って演習も組み込み学習する。表現型に基づいた類例の反復学習と演習により、同様の表現を作成することを容易にし、英語で短文を書くことに慣れ、かつ応用が利くようにするよう促している。

- ・総合英語は、獣医学科選択 2 年次科目である。この科目は英語・語学の区分ではなく、人文系科目の選択科目に位置付けられている。それは従来の英語科目 2, 3 年次配当授業というしばりにとらわれない自由な内容の選択科目として新たに導入されたものであり非常勤講師にはこれは担当させないこととしている。その年により。総合的な学習内容＝聞き取り、

TOEIC 的な問題演習、読解、語彙学習、英作文表現、プレゼンテーション、ビジネス英語表現など、隔年の担当者により多様な内容を展開してきた。また曜日と時間の都合もあり、学生には比較的履修しやすい状況となっており、英語であるにもかかわらず、近年選択者が相当に増えてきた。今年度は読解と作文に焦点をあて、学習を通じて英語力の維持・向上に努めた。課題も緩やかなものとし、教材をある程度楽しんで取り組んでもらうようにしたため、概ねの目標＝資料に適格に対応し、問題に取り組み理解する＝という課題にはほぼ達成できたと考える。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。(自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか、自らの信念、価値、目指すもの)

なぜ英語学習か：高等教育における英語学習は、学会レベルではそれほど進展が顕著であるとは思われない。資格検定の学習導入は、1990年代より加速したが、近年では高校までの資格・スコア修得がすすみ、大学での役割は減少傾向にある。本学で英語を学ぶ大きな根拠はなにかというと、外国語を通じた「言葉の学習」の継続にある。理系文系を問わず、人間の社会的営みは「言葉」を通じて行われる。言葉による論理性、明晰さを涵養することが、実際のコミュニケーション能力、文章表現能力、プレゼンテーション能力に共通するスキルであると考え。英語を学ぶ理由は、そのような言葉学習に必要な言語運用に関するあらゆる内容を学び、自分の発信力・理解力、あるいは他者への思慮などを養うことにもつながると考えるのである。

信念：英語学習での最も重要な取り組みは、語彙を習得すること、英語授業に関心をもってもらうことにある。内容への関心がなければ、入試以降のモチベーションは本学においては下がってしまうからである。専門教育が重視される本学での英語教育の取り組みで最も重要なことは、「動機付け」だ。学びを促進する誘因としては、「学習内容」が最も効果的であると考え。動物の医療、健康、仕組み、生態、環境などを中心にするにより、学ぶ者のモチベーションを維持することが可能であると考えている。獣医学部という特質に沿った内容に特化することが、高いモチベーション維持に有効である。更に、そのための教材については、読解・表現ともに毎年厳選し、内容を常に改良するようにしている。

価値・目指すもの：我が国の社会生活をめぐって、英語が活用されることは決して多いものではない。ビジネスでは英語を用いる部分があっても、部署や業務内容により該当しない場合が多いのが現実である。学習者もそれは理解しているため、英語学習の価値を見出すことは決して容易なことではない。従って、大学での修学については、英語の学習の意義をより明確化する必要がある。動物・医療・健康・生態環境などに関する語彙を多く習得し、さらに文章理解と表現力をつけることにより、自分の言語運用能力を向上させること、そこに価値を見出だすように促すことが重要である。

### 3. 教育の方法 (理念を実現するための考え方, 方法)

教育の目的と目標 (これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法)

教育とはその人の人間としての成長を支援するものである。単に学力や学びを促進するだけでなく、人としての成長を促し、励まし、支援するものであるべきだ。単に学力をつけるだけであれば、教育コンテンツを整備したり、ITC技術の進歩により、高等教育における自学自習は一層すすむことになるだろう。「教育」とは、技術的な方法論だけで測れるものではない。

人間が人間を教えるということは、その科目や教育内容にも当然左右されるが、繰り返すように人間造りを支援するものである、それでは人間造りとは何か。人間が人間として正しい道を生きることができるよう、その「正道」を促すことにある。「正道」は、しかしながらその学校や学問分野に大きく影響されるものであるから、道徳・倫理の基本は、その教育現場・学校の理念または、その分野にもよるところが大きい。本学麻布大学は人と動物の健康とその周囲にある多様な分野・医療 医学 食品 環境など多岐に及ぶ。その核心にあるものは、人間と動物の「生命」である。「命の学」を唱っている本学の核心・倫道徳に直接連関するものは、この「命」に関することだ。教育者の一人として、現場に接する際に最も重要視すべきことは、命の学を学びに来る者に教育を施す、ということにある。そのためにも、教育者は命というものの本質・重要性を常に考察し、それを教育内容に少しでも関連づけ、学ぶものたちに「正道」の意味をうながすことが必要と考える。語学を通じての倫理道徳観の涵養という課題は、やや語学教育の本道から逸れるようでもあるが、特に本学は生命科学を中心とした専門領域に特化した実学主体の大学である。その意味から人間教育は必ず必要となる。機械的な学問内容の習得という方法論は避けるべきであり、どのような教育領域においても、「生命の尊さ」を示唆し、これを考察できるような教育環境を提示することが重要と考える。

具体的には動物の倫理を基本研究テーマの一つとし、英語授業で扱う内容も基礎科学英語から講読、英作文表現にいたるまで常に人間と動物の健康、医療、環境、衛生、倫理などに触れるよう努め、学習内容を通じて学ぶ者にはその重要性を(決しておしつけるのでなく)感じるよう努めている。

#### アクティブラーニングについての取組

英作文表現Ⅱにおいては、テーマについてのグループ学習を行っている。数名のグループに分けて、見解を出しあい、さらにポリッシュしてグループとしての意見を出す。

また、それに対するクラス全体の意見集約なども行う。

講読Ⅱにおいては、読解スキルの上達のために、リアクションペーパーの作成を通じて、こちらからの例も提出し、双方がお互いの理解を進行させるように努めている。

#### ICTの教育への活用

英語授業に関するICT教育の活用は、これからの外国語学習の可能性を拡大させるための方法として現在検討段階にある。ただしICTの方法だけが言語運用学習に有効であるとも考えていない。例えばTOEICのスコア向上学習は読解や表現作文に効果があるわけでは決してない。なぜかというと、資格検定試験英語学習は、あくまでその試験のためのスコア向上のための学習に隔たる傾向にあるからだ。実際スコア上位の学生でも読解力、あるいは実践的作文力が同様に高いわけではない。文章理解・表現法はまた別のものである。

#### 4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

##### ①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

B 特に今年度は、ほぼ遠隔式授業実施ということもあり、前期は学理を通じた資料配信、授業内容は PDF で添付し、オンデマンドとした。後期は Google Meet を用いて学理の資料に基づいて、前半は登校日対面、後半はほぼ Meet による授業を実施した。こちらも学生の顔や表情を見ることもできず、語学特有の「当てる」「その場で解いてもらう、取り組む」演習的内容がほとんどできなかった。Meet においては挙手や意見の聞き取りは行ったものの、積極的な発言は少数であった。

##### ②学生の理解度の把握（A～C）：

A 世界文化史、英作文表現Ⅱ、英語講読については、評価にも影響する Reaction Paper を用いて毎回の授業についての理解度を測ってきた。それにより毎時間の授業にどのように取り組んだかが分かる仕組みになっている。基礎科学英語は、例年単語試験と最終試験によりその理解度を確認してきた。今年はそれは課題という形のみになってしまったが、履修者は見慣れない基礎科学英語の資料にもしっかり取り組んでくれたようである。

##### ③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

C 英作文表現や基礎科学英語について該当する項目である。英作文表現では、Practice という演習項目を多く設けている。一つ一つの学習項目について、Practice を通じて確認・応用できるというものだ。今年度は特に授業内でこれを全員に説明・確認するようにして、自習という扱いにはしなかった。またすでに類例としての解の例を資料内にもりこんでおり、履修者はその場で確認できるようにした、その意味で自学自習につながるとはややかんがえにくい。授業効果という意味では時短の効果はある、それについては、独自の授業アンケートを通じて資料の見やすさ、わかりやすさへの指摘があり、ある程度納得できるものである。

基礎科学英語は、自学自習をしてほしい授業である、特に新出語彙については、どれくらい時間をかけて新出語を学習したのかを確認する必要があるが、今年度前期はそれがほぼできていない。時折の課題でやや確認するにとどまった。

##### ④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

B 履修者からの質問については、すべて対応してきた。学理と学内メールを通じて対応したものである。特にメール対応は再確認も容易であり、履修者が納得することが確認できる。

##### ⑤双方向授業への工夫（A～C）

C 語学ということだけでなく、講読・表現ともにリアルタイムで Meet 授業時に随時質問等を行うことにより、双方向的授業を進行しようとしてきた。Meet 参加者については、内容により反応はあるものの、挙手や一人二人程度の反応しかなく、十分に機能しているとは言い難い状況ではある。また課題への返却については、振り返り学習ということで、課題解答・類例を提示してきたが、全回数に対応できる余裕はなかった。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)

## 5. 学生授業評価

### ① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

毎年資料内容の変更を行っている。授業改善は授業評価と、自己分析に基づいて、その到達目標・教育目標に少しでも近づくよう資料は変更に変更を重ねている。語学はいわゆる市販の大学英語教科書を用いているわけではなく、すべてオリジナルであるために、変更はかなり容易である。例文種類の変更から、説明の記述にいたるまで Word file による作成であるため、授業後に思いついた箇所でも次年度のために随時変更している。

### ② ①の結果はどうでしたか。

履修者の反応を変更箇所に基づいて確認しているわけではないが、徐々に教材は良いものになっていると感じている。

### ③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

学生による授業評価の項目の中で、予習復習の時間が少ないことが挙げられている。これは「自学自習の向上」にもつながることと認識している。しかしこの課題については、このような授業評価アンケートが始まって以来の課題でもある。課題を増やせばよいというものでもなく、世界文化史のように予習というものがそれほど重要でもない科目もある。すべての科目に同じ対応をする必要はないが、少なくとも英語については、予習よりもむしろ復習に重点を置き、何を学習し理解したか、あるいは理解が十分でないかを確認できるような授業展開をする必要があると考えている。そのための方策は、reaction paper、minutes paper などを利用 (学理内で) することで、履修者にむしろ理解への「安心感」をもたせるようなものを導入することを考えている。

## 6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

特に、講読の授業においては、本当に問題の箇所を理解できているのか、「読む」作業が年々少なくなり、文献・書物をしっかり読み、理解する習慣の減少している状況を考えると読むことの重要性が一層強調されるべきと考える。読解力向上については、まず教材選び・厳選した内容について、授業内での確認をしっかり行うことが取り組みの一つと考えられる。

英作文表現について、特に表現Ⅱについてであるが、翻訳ツールが普及している現在、翻訳ツールに依存する者が多い。本当に辞書などを使いこなし、英文作成することは、細かい語法や例文に接しながらでないと正確な文章につながらない。表現力向上のためにも、辞書を用いて作業させる時間を増やすことを検討している。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

・卒業論文については、自分の考案したテーマに基づき、自部の意見を自由に英語で述べるという目標をほぼ達成できている。

・研究室のゼミにおいては、1年間の活動を通じて、様々な文献を通じて **discussion** をすることにより、グループの中で自分の見解を口頭で述べ、また他者の意見をしっかり聴いて物事を考えるような取り組みに慣れ、またこれを実践できるようになった。

・語学授業全般においては、シラバスに沿った教育目標・授業到達目標については、ほとんどの履修者がこれを達成できていると考える。これについては授業評価アンケートでも示されているとおりでである。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)

学内で開催される **FD/SD** 研修会にはほぼ毎回参加している。シラバス作成と内容改善の取り組み、ステークホルダーに対する言葉使い講習、ハラスメント問題、著作権問題、科研費使用の問題などの諸活動に出席し、自身の教育活動、授業改善、シラバス作成、対学生との姿勢などについての参考としている。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。

今後の目標：英語を通じて、人間的にも倫理的・道徳的成長を促すような内容を展開し、言語を学習しながらその人の感性を錬磨できるような授業内容を展開していきたい。そのためにも授業準備・教材内容の厳選には慎重に取り組む必要がある。英語学習は機械的・検定試験用の単調な授業だけに特化するべきではない。授業は教育の実践の場であるので、先述の教育理念を実現するためにも、英語科目・世界文化史を通じて「人を育てる」授業を目指すよう志向するように努める。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

- 授業科目シラバス
- 授業評価アンケート
- 科目内独自授業アンケート   • 授業項目に対する感想